

## 『東方』二九八号より

### 「世紀の著作」

## 『新探 中国文明の起源』を読む

平勢隆郎(東京大学)

読者は「区系説」という言葉をご存じだろうか。本書の著者蘇秉琦氏が長年の研究を基礎に一九八〇年代から九〇年代半ばにかけて理論体系化されたものである。①燕山南北長城地帯を重心とする北方、②山東を中心とする東方、③関中・晋南・豫西を中心とする中原、④環太湖を中心とする東南部、⑤環洞庭湖と四川盆地を中心とする西南部、⑥鄱陽湖から珠江デルタへの線を中軸とする南方、という、六つの地域(区)をにらみつつ、それぞれに成立した新石器時代の文化を時期を追って(系)整理していく。

現代の中国考古学を研究する者が、いわば前提として論じる説になっている。評者もその末席に座る一人である。

一般には、黄河流域と長江流域という二つの大河に注目し、中国の古代文化を整理していくという方法が知られているはずである。区系説は、これをさらに細分し地域をやや拡大して整理するものである。

本書の一つの特徴は、蘇秉琦氏の文章以外に、郭大順氏の「日本語版序」、陸思賢氏の「解説」、さらには編集部・島亨氏の「編集註記」が付され、それぞれが蘇秉琦氏の文章の解説の役割を果たしていることである。また、訳者張明聲氏が蘇秉琦氏の言葉そのものを適宜用いながらその意味を「」に補いつつ訳を進めていることは、著者の真意をわれわれがたどる上で、大きく貢献している。

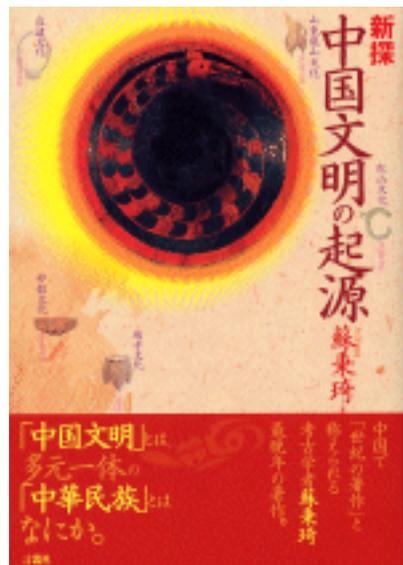
だから、読者は本書を手にするだけで、著者蘇秉琦氏の

▶ トップページにもどる

蘇秉琦著／張名聲訳

『新探 中国文明の起源』

A5判・二四八頁・言叢社・二、九四〇円



蘊蓄のみならず、それを他人の目、それも複数の目でながめた結果を参照することができる。

蘇秉琦氏の執筆部分は、合計七章からなる。

第一章は「二つの怪圈」と題された。「怪圈」とは怪しげな考え方の圏域であり、一つは根深く強固な中華大一統の観念、もう一つはマルクスの社会発展法則を本質とみなす観念である。蘇秉琦氏は前者を否定して中原の夏と周辺の夷との優劣を相対化し、それぞれについて異なる民族伝統の背景や異なる種族の差異を論じている。夏・殷・周それぞれについて、その種の差異を念頭において事実を紹介している。後者の発展法則についても、本来異なる差異や背景を論じるべき事例を発展段階の差異に置き換えた誤りを論じ、優劣(正統と非正統)を前提とする論を批判する。

第二章は「学説『天書』」である。「天書」(考古事象)にかぶりつき、これをひもとく暗号(密碼―秘密番号)を見つ

け出そうとしたものという。一九三〇～四〇年代の経験を述べる。鼎と鬲(いずれも三足の器で権威の象徴として論じられる)がそれぞれ来源を異にすること、殷と周が来源を異にすることを認識して、中華大一統とは異なる観点から考古学的方法論を運用しようとしたことを述べる。

第三章は「解悟と頓悟」である。一九五〇～六〇年代に、仰韶文化の研究を通して、仰韶文化の基本的特徴とその社会発展段階、区系分布および源流を認識する基本的前提ができあがったことを述べる。解悟は迷いから解き放たれて真理に至ること、頓悟は一瞬にして悟ることである。

第四章は六つの区系を紹介する。中華大一統という觀念の下に形成された「黄河流域は中華民族のゆりかごで、中華民族文化はここから発展してきて、それから四周へと広がり展開した。そしてその他の地区文化は比較的に立ち後れ、中原地区の影響があればこそ発展できた」という觀念、すなわち歴史考古社会にある根深い中原中心、漢族中心、王朝中心という伝統的觀念に挑戦することになったことを述べる。それぞれについて、周をさらに遡る時期の青銅器文化にも言及する。

第五章は「星が天に満つ」である。区系説で問題にされる地域が決して孤立した社会を形成していったのではないことを、分裂(二つに地域に複数の文化ができあがる)、衝突(二つの文化が出会って影響しあう場ができる)、融合(複数の文化要素が融合する)の概念を用いて説明する。とくに直根系とまとめた中原と北方にそれらが指摘できることを述べる。空に満ちる諸文明の火花があつて、その中でも最も早く立ち昇った地域を述べるものである。

第六章は、三部曲(三段階の編制)と三模式(発展段階の三つのモデル)を述べる。三部局とは古国(都市国家式の原

▶ トップページにもどる

始国家)―方国(夏・殷・周三代とそのやや前。都市が他の都市を従える)―帝国(秦以後)であり、三模式とは原生型(北方地区の紅山文化、夏家店下層文化、古い時期の秦)、次生型(夏殷周三代を中心とする。中原と秦。伝説の堯舜まで問題にする)、続生型(北方草原民族。秦漢以降に中原に入った鮮卑、契丹、清など)である。これらの概念により、中華統一多民族国家の発展に対する働きを述べる。

第七章は、さらに一歩進んで中国考古学と世界考古学の接続、古と今の接続、という二つの接続を述べる。区系の観点を世界的な観点に引き延ばし、世界的な立場から中国を認識するものという。区系の区は三つずつの二グループに分けられ、それぞれ世界を大きく二つにわけた海洋文化(東側)と大陸文化(西側)とに接続している。中華民族の豊かな包容性と凝集力にも言及する。

以上、本書は考古学の成果を使いつつ、現代にいたるまでの歴史と世界との関わりにまで目をくぼけて、しかもとてもコンパクトにわかりやすくまとめられた書物となっている。

ただ、すでに述べたことと一見矛盾するようにも見えるが、研究者が手放して蘇秉琦説を認めたということにはなっていない。これは解説に説明されている。ご意見はわかるが(事実として提示されたものを否定しようとは思わないが)、(結論として示されたものについて)自分は必ずしもそうは思わない、ということである。蘇秉琦氏が多元一体の多元を強調したのに比べ、多くの研究者は一体の祖形を求めたがる傾向があるようだ。近年夏王朝として中原の二里頭文化圏が議論されるその議論の成り行きに目を向けても、その傾向が見いだせるようだ。

しかし、その傾向には、蘇秉琦氏が危惧した根深い中原

中心、漢族中心、王朝中心という伝統的観念が見え隠れしてはいないか。そして、この懸念から出発するならば、問題は漢字圏の形成のことに直接に関わってこよう。その漢字圏が東アジア世界を生み出した歴史にまで降って周囲を見回してみたとき、蘇氏の危惧が、東にせり出して日本を含む海洋文化圏まで拡大されることは容易に了解できる。蘇秉琦氏の深慮遠謀が、現代の中国を歴史的にどう位置づけるかに関わり、上記の危惧を回避するものであったことを、あらためて知ることができる。

私事に関わるように恐縮だが、評者は蘇秉琦氏が「方国」と位置づけた時代の最後の戦国時代に、「区系の「区」を反映させたような歴史観がそだったことを述べている（講談社『中国の歴史2・都市国家から中華へ』。蘇秉琦氏のこの時代を「大国・小国の時代」と「領域国家の時代」に分け、両者の間に、つまり春秋から戦国にかけての時期に鉄器の普及があったことや戦国時代に律令法体系が出現したことを重視している。こうした相異はありながら、蘇秉琦氏を参照するかぎり、評者は海洋文化圏たる日本まで視野にいれながら、そして考古学的検討ではなく経典等のいわゆる伝世文献をまとめる作業を進めながら、蘇秉琦氏の方法を追究した、ということになりそうだ。

付けたりを述べれば、蘇秉琦氏は第一章で『論語』を引用しつつ、区系説を述べる上での序として「中原の夏とその周辺の夷がそれぞれ自分のルーツを持っていることを認識していた」とまとめている。蘇秉琦氏の問題関心は、意外に評者に近い（主客逆転させた方がよかろうか）、こう思うのは評者だけだろうか。

以上述べた評者のものとは異なる関心から、本書の「日本語版序」、「解説」、「編集註記」が書かれているわけだが、

▶ トップページにもどる

蘇秉琦氏の所論は、いわばそうした個々の関心を映し出す鏡としての役割もある。本書が「世紀の著作」と称えられるのも、ひとつにその役割が大きいために違いない。

「編集註記」によれば、島氏は「解説」を書かれた陸思賢氏から、日本の列島文明は中国文明とは異なる「海洋文明」であり、そこから育まれた国ではないか、そのことを編集者として書いてみてはどうかと薦められた由である。すでにほのめかしたことに関わるが、日本を「海洋文明」から、という視点は、とても興味深いものである。そのお薦めに評者が答えたわけではない。しかし興味深く拝読した結果をわずかなりとも述べておく方がよいと考えて、評者の問題関心からする日本を念頭におきつつ、本文の最後に私事をご紹介した次第である。

読者におかれても、読者自身の関心から、本書を熟読されることをお薦めする。できれば日本をも念頭において、である。